大蛇退治

さまにお供えして帰って行かしたと。
そしたら、ふしぎなことよ。長いこと身動きできなんだごっさんが、井戸端で水汲んどらしてな、兼さの姿を見ると、
「おまえさま、さっき、うとうとしとったら夢まくらに如来さまがお立ちなされてのう、『もう、ようなっとるにおきてみよ。』ともうされたわな。それでおきてみたらほんとにおきれて……。」
と、ぼろぼろ涙こぼさしたと。
そりゃあ兼さもよっぽどうれしかったんやろうて。
さっそく如来さまに小さなほこらをこさえてあげさして、ごっさんの長わずらいをすくっておくれた四月の二十四日を如来さまの日ときめておまつりをするようにならしたのよ。
今でも、その日はあっちこっちからおまいりにおいでるよ。

あれ、ゆうじ、ねむなったか。こんなとこで寝てはかぜをひくぞ。おじいちゃんのはなしはまたこんど。さあ、みんなもう寝よよ。」

近藤一子

大蛇退治

むかしのこっちゃ。小木（諏訪町）の深見沢に、いつともものう大蛇がすみついて、田畑を荒らすわ、家畜はとるわ、しまいには人間までものみ殺し、悪いことばかりするんで、村の人たちはこわがりはててておった。

そのころ、この村に治衛門という郷士が住んでいて、ある日、深見沢に近い谷間で木を切っていたが、夕ぐれもせまったので家に帰ろうと、道具をしまい、まさかりをかついで、うす暗い谷を登りはじめた。

そのとき、サーといやな風が下の方から吹きあげてきた。

「気味の悪いことやなあ、大蛇でも出るんやなかろうか。」

ひょいとうしろをふりむくと、目をらんらんと光らせ、大きな口からきばをむき出した大蛇が、治衛門めがけて登ってくる。

腰をぬかさんばかりにおどろいた治衛門は、さすが郷士だけに気丈にも、まさかりをふるって大蛇にたちむかっていった。

しばらくの間は、必死に大蛇とたたかったが、なにしろ、今までに何度も人やけものをのんだほどの大蛇だけに、力つきた治衛門はとうとうのみこまれてしまった。

ところで治衛門には、十二、三歳になる、近所でもひょうばんの孝行むすこがあった。

五郎という、そのむすこが、父親のことを聞いたときの悲しがりようは、見るもあわれやった。泣けるだけ泣いた五郎は、

「自分が大きゅうなったら、親を殺したにくい大蛇を退治して、きっとかたきをとってやろう。」

そう決心をした。

それから四、五年たって、五郎は、りっぱな若者になった。

ある日、五郎は大きくがんじょうな草かりガマをゴシゴシといで、よう切れるように仕上げると、それを手に深見沢に出かけた。そして、それから大蛇の出るのを待った。

今に出るかと、待っていたが、その日はついに大蛇が出ず、次の日も、また次の日も五郎は深見沢に出かけた。

十日ほどたった日のこと、夕ぐれになったので五郎は、きょうも出なんだなと思いながら、深見沢のがけを登りはじめた。そして、父親が大蛇にのまれたあたりまで登ったとき、ゾオッとするようないやな風が沢の方から上がってきた。

五郎は思わずカマをきっと持って身がまえた。

淵の水がざあっと水煙をあげると、その中から頭を出した大蛇が、吹きあげる風にのって五郎めがけておそいかかってきた。

首切り地蔵

「さあこい、親のかたき、にくい大蛇め。」

まゆをつりあげた五郎は、必死になって大蛇とわたりあった。

大蛇は、しっぽを立木にからませ、かまくびをもち上げ、高いところからたたきつけるようにむかってくる。

五郎も、岩かげに体をふせたり、立木にかくれたりしてたたかったが、大蛇にはかなわなんだ。

そして、とうとう大蛇の太い体に巻きつかれてしまった。

大蛇は赤いしたをぺろぺろとなめずるように出したと思うと、ぐいっとひとのみに五郎をのみこんだ。

ところが、五郎の手にはカマがしっかりにぎられておった。

ぐいっ、ぐいっと大蛇が五郎の体をのみこむたびに、五郎の手ににぎられたカマで大蛇の腹は切りさかれた。

さすがの大蛇も、うなぎのように腹をさかれてはたまらん。のたうちまわって死んでしまった。

五郎は大蛇の腹を切りさいて、中から出た。

こうして父親のかたきはうったし、村もこわいものがおらんようになった。めでたし、めでたしじゃ。

永井逸風